

二条中通信

第 27号
二条中学校
H21.1.16
文責：直江秀樹

* 【学校教育目標】 学ぶ楽しさを実感し、夢を持ち夢を実現するために努力する生徒の育成

「1・17を忘れない」～避難訓練実施しました～

1月8日、京都市に大きな地震が発生し、二条中学校にも被害が及び、校舎の火災が起こったという想定で、避難訓練を実施しました。これには、上京消防署の方に来ていただき、ご協力とご指導をしていただきました。私たちの訓練は、全校放送の指示をよく聞いているか、各教室で身を守るための動作を機敏にとれたか、担当の先生からの指示に従い、整然と早く危険を回避しグラウンドに集合できたかなど、生徒と共に教職員の適切な動きについても訓練の項目です。避難するよう放送指示があったから全校生徒グラウンド集合までの時間は、3分46秒。早く移動完了できました。

しかし、消防署の方に講評をしていただいたときに「おさない。はしらない。しゃべらない」いわゆる「お」「は」「し」の実践で「しゃべらない」が、できていない人が一部ですがいたので注意するよう指摘を受けました。緊急事態です。不安はあっても口々に話をすると大切な指示がきこえなくなったり、間違った情報に左右されたりしてしまう危険性があります。今回のご指導を肝に銘じておきたいものです。また、あと一つ「もどらない」ことを強調されました。大切なお金や品物を忘れたからと言って、火や煙に包まれている場所にもどることがあってはいけないということです。「命」より、大切なものなどないからです。このことを忘れないください。

この日は、起震車の出動があり「地震模擬体験」をしてもらいました。阪神淡路大地震と同じ規模の震動を体験します。非常事態ですが、そのときこそあわてず的確な行動をすることで、被害を少しでも少なくできるとご指導されました。（家の中にいることを想定して）

まず、身を守る。テーブルの下に隠れる。 火を消す ブレーカーを落とす 震動がおさまったら外に出る。 一時避難場所に移動する

そして、「非常持ち出し」セットを常備していることの大切さも述べられました。

今から14年前。平成7年（1995）1月17日午前5時46分。兵庫県淡路島北部を震源地とするマグニチュード7.3の、大都市直下型大地震は、兵庫県だけでなく私たちの住む京都も含めて、想像を絶する被害をもたらしました。特に、神戸市は壊滅状態になりました。

死者6,436名。負傷者44,000名。避難人数30万以上。住宅の全半壊は46万世帯。火災による被害は9,000世帯以上

という戦後最大の地震となりました。私もこの日、家が大きく揺れ、寝ている子どもの枕の上で家具や本箱が倒れないように支えるのがやっとでした。人形のガラスケースが落ち、割れました。出勤の電車はいくら待っても駅には来ませんでした。

あれから14年の歳月が流れましたが、ご家族の悲しみは消えることがありません。先日、読売新聞に震災当時小学校の校長先生で、小学校が校区の避難場所になった体験を語る岡本武利さん66歳のことが載っていました。



長田区の校区内はほとんどの家が全半壊（焼）、107人が犠牲になり、学校内は避難した被災者計1700人であふれました。「何で電気が来んのや」「責任者は何している」。被災者の要望が教師に次々と舞い込んできたとき、力をくれたのは子どもたちでしたと語る。6年生が率先して校内の掃除を始め、下級生らに紙芝居を読み聞かせた。これを機に、避難所の空気が変わった。廊下を掃除する人が現れた。炊き出しを受ける被災者に児童が「一人分にして」と言うと、その呼びかけにみんなが従ったという。

京都新聞では神戸出身のシンガーソングライター平松愛理さんの阪神大震災復興支援チャリティーライブのことが掲載されていました。平松さんは、震災直後に兵庫県出身の作詞家阿久悠（あくゆう）さんと「美（うま）し都～がんばろうや We love KOBE」を作った。昨年 作詞をした阿久さんが一昨年亡くなって、いっそうこの曲に思いが強くなったという。そんな記事がでていました。

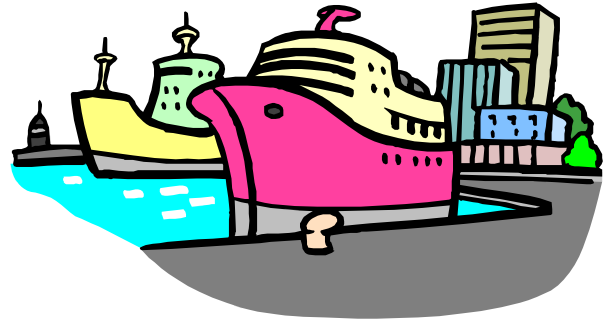
その平松さんには忘れられない出来事があった。

1999年1月17日。震災遺児のケア施設の追悼式典で、平松さんは子どもたちの姿に心を痛めた。兄弟の名前を呼び、献花台に花を手向ける少年。亡き父に手紙を読む少女。・・・「ここは歌う場所ではない。悲しみに打ちひしがれ震える人たちを前に、元気を出して、なんて歌えない」そんな気持ちを抱きながら、マイクを使わずグランドピアノの語り弾きで「美し都」を歌い始めた。静まり返る場内。視線が刺すように痛い。逃げ出したい気持ちを必死にこらえた。サビに差し掛かった時、観衆の声が漏れた。耳を疑った。すすり泣きに混ざった「美し都」の歌詞だった。

We love KOBE がんばろうや

歌声と、すすり泣きが、伝染したように広がり、会場全体を揺るがした。「これが歌の力なんだ」全身の血が鳴動した大合唱を平松さんは忘れたいと言う。歌ってよかった。

「がんばっている人に、『がんばって』とはいえない。けれど、私には歌がある。がんばってという思いをメロディーにのせて、神戸の人の心に届けたい」と語っていました。



1月17日は忘れない

突然目の前が真っ暗になり あちこちで真っ赤な炎があがっていた 叫び声が聞こえ
サイレンが鳴り響いていた 多くの人が貴い家族を失った
わたしたちは過信していた 科学技術を、近代都市を わたしたちは忘れていた
共に生きているということを 支え合うことの大切さを
皮肉にもそれを教えてくれたのがあの震災だった
頼るべき家族がたおれ 自らも力尽きようとした時 手を差し伸べてくれたのは
地域の人々やボランティアの人々だった 手に持てるだけの物を持って
彼らは助けに来てくれた
組織の思いでなく一人ひとりが自分の思いで助けあった
子どもたちも自分の意志を持って 自分の責任で行動し、家族を支えていた
あのときのひたむきな人々の表情
人間のつながりの貴さを わたしたちは決して忘れないだろう
あの日 海がさわぎ、山がないた わたしたちが愛した風景
育ってきた環境は 一瞬で姿を変えた しかし共に困難を乗り越えて
十年にわたる復興を通して この地に対する愛情は より一層深まった
震災から学んだ教訓は余りにも大きい 個人個人が持つ命あるものへの思い
わたしたちはかけがえの無いものを代償に 身を持って痛感することができた
この思いを その貴さを 地球上の人々に伝えなければならない
だから 1月17日は忘れない

2005年1月17日 1・17人類の安全と共生を考える兵庫会議

(2005年1月17日 毎日新聞掲載)